

煩惱にまなこさえられて
撰取の光明みざれども
大悲ものうきことなくて
つねにわが身をてらすなり

(『高僧和讃』 聖典四九七～四九八頁)

我、他力の救済を 念ずるときは

第4組 島松寺住職

吉田 敦史

text by Atsushi Yoshida

恩師との再会

今年の4月中頃、高校時代の担任から電話があった。師の奥様が逝去され、私に葬儀を依頼する連絡だった。師の家は他宗派の信徒であったが、奥様自身が病床で私に葬儀をして欲しいと希望されていたようである。

この時、数年前に高校の部活の監督から母親の葬儀を頼まれたことを思い出した。奇しくも高校時代、私を心配してくれた恩師二人のご家族の葬儀を勤めたことで、約30年前の両恩師との出会いがよみがえってきた。特に部活の監督にはよく叱られた。監督は旭川の門徒の家に育った方で、私が将来住職になるのを見据え、性根や態度を厳しく指導していただいた。

私は陸上部であったが、監督はよく「陸上は個人の競技だが、団体競技である。共に励まし合うことで辛い練習も乗り越えられる」と口癖のように語り、「私は君達を指導する立場だが、私の全てが正しいということはない。間違いもたくさんある。そして君達生徒から毎日教えられて私も成長させてもらっている」と語られていた。部活の監督として生徒を指導する立場にあっても自身の間違いや至らない点を生徒の姿から問い確かめていることを告白してくれたことは驚きであった。だからこそ厳しい指導も、素直に共感することができたのだろう。もし絶対的正義を振りかざしていたならば、共感できていたかどうか分からない。

他力の救済

大谷派近代教学の祖といわれる清澤満之には「他力の救済」という文章がある（定本清澤満之文集七六頁）。この中で清澤は、人間が生涯這いつくばり迷い苦しみ悶え続ける原因を「物欲」と表現し、「我、他力の救済を念ずるときは、我、物欲の為に迷わさるゝこと少なく、我、他力の救済を忘るゝときは、我、物欲のために迷わさるゝこと多し」と語った。

ここで言う「物欲」の「物」とは財産や金品だけでなく、自分の身体をも含め、私の外側にある全てのもの、つまり社会や家庭など私を取り巻く環境やそれを構成するあらゆるものとその仕組み、更にそこに存在する全ての人々を「物」と押さえられた。また他の文章では「外物他人」とも表現している。この「外物他人」に対する欲とは、所有欲はもちろん、自分は決して間違っていない正しい者と信じ、それを他者に認められ共感され、全てが自分の思うままに成っていくことを強く望む欲望のことをいう。

私の生活の中心にあるこの「外物他人」に対する欲、「物欲」を釈尊は「煩惱」と表した。清澤は「他力の救済の念」によって自らの迷いの根源が「煩惱」であること知らされた深い感銘を「他力の救済」という文章で表された。清澤にとって迷いの多少はあまり問題ではなく、「迷いの根源」を知らしめる「他力の救済」に出遇ったことが何よりの喜びだったのであろう。

攝取の光明

「他力の救済」とは阿弥陀仏の本願を清澤が明治的感覚で新しく表現したものとと言えます。故に「他力の救済」は「煩惱」を照らす本願の用きを意味しますが、「煩惱」はその本願の用きを遮る作用もあるのです。この事から宗祖の御和讃「煩惱にまなこさえられて」の一首（聖典四九七～四九八頁）が想起されます。自らの「煩惱」によって迷いの根源を見つめる眼を遮っている私を「他力の救済」、つまり阿弥陀仏の一切衆生を攝取する大悲心は、決して投げ出すことなく照らし、そして常に正義は我にありとにぎりしめる私を問い続けてくださるとこの御和讃は嘆じておられます。

前出の陸上部監督は仏法にいつも触れているというわけではありませんが、門徒の家に育ち、念仏申す祖父母や両親の姿を通して、自分に正義ありと握りしめてしまう自分を問う姿勢が自然と体に染み込んでいたのではないかと、ただいいております。